

『ブラウンシュヴァイク雑誌』にみるドイツ啓蒙の具体像（1）

山内 規嗣
(2015年1月5日受理)

Reification of the German Enlightenment by Focusing on *Braunschweigisches Journal* (1)

Noritsugu YAMAUCHI

This paper examines the purpose of the publication *Braunschweigisches Journal* in the context of comments provided by one of its editors, J.H. Campe, and one of its critics, C. Garve. These comments point to a contradiction with the German Enlightenment, whereby the supposed equality of all individuals was dismantled by a hidden hierarchy of editors, writers, submissive readers, and slaves to modish trends. Accordingly, this paper examines the relationship between theory and practice in the German Enlightenment as representing essentially the border between self-enlightenment and self-criticism.

Key words: Philanthropinism, German Enlightenment, Enlightenment Journal

キーワード：汎愛派、ドイツ啓蒙主義、啓蒙雑誌

はじめに 問題と目的

近年、学校教育改革と生涯学習社会の推進とをめぐり、いわゆる理論と実践の往還への期待がますます高まってきている。大学の教員養成課程に向けられたその期待は、学生とともに研究者が子どもの学習をとりまく多様な実態に積極的に関与しながら、同時にその実態のみならず学校の内外で実際の処方とされているものに対する批判的検討を行うことへの要求を、ひとまず意味することになるだろう。

この実態への関与をより具体的にとらえるならば、その一つのありかたとして、いわゆる教育雑誌を媒介とする伝達と相互交流が挙げられる。そこでは、変化しゆく子どもと学校などの実態に適応するかたちで研究成果が啓発的に説明され、またこれに対する教師や保護者からの反応や要求を受けてその後のテーマ設定などに関する編集方針が修正されていくのである。この役割を果たそうとする教育雑誌を、さらに広く教育に関わる思想普及と社会的啓発を目指すものとしてとらえれば、我が国の近代にも明六社以来の伝統が確認されるような啓蒙雑誌のうちに含まれることとなる。

さて、18世紀以降のドイツにて長らく読み継がれてきた児童・青少年文学作品『若きロビンソン』の作

者として著名なカンペ（Campe, J.H. 1746-1818）は、汎愛派の中心的人物の一人として様々な教育著作を自ら発表するとともに、『総点検（Allgemeine Revision）』をはじめとする、とりわけ教育を主題とする啓蒙雑誌の編集に携わったことでも名高い。本研究が取り上げるのは、そのような啓蒙雑誌の一つ『ブラウンシュヴァイク雑誌』（Trapp, E.C., Stuve, J., Heusinger, C., Campe, J. H. (Hrsg.), *Braunschweigisches Journal philosophischen, philologischen und pädagogischen Inhalts*, Verlag der Schulhandlung, 1788-1791. 以下、本文中での引用・要約時にはカッコ内に第1号（1788年1月号）のページ数を記す）である。

この雑誌は、『教育総点検』にも協同編集者として名を連ねたトラップ（Trapp, E. Chr.）やストゥーフエ（Stuve, Joh.）、またホイジンガー（Heusinger, Conr.）がカンペとともに再びその編集者となり計画されたもので、1788年1月から1791年12月までの間、毎月刊行された。その後、名称を『シュレスヴィヒ・旧名ブラウンシュヴァイク雑誌（Schleswigsches ehemals Braunschweigisches Journal）』と改めて、さらに1792年から翌93年までの間、年3回刊行を継続している。

これまで汎愛派の啓蒙雑誌に関する内外の研究では、1785年から1792年にわたり編纂された『総点検』

が主たる注目対象となっており、我が国でも例えば山内芳文がバールト (Bahrdt, Chr.) の第1巻巻頭論文を手がかりとしながら彼の教育概念の変容とその近代における家族論から国家論への脈絡における限界を分析し、また森川直がとくにカンペとストゥーフエを対比させながら汎愛派教育思想の修正的展開を明らかにしてきている。しかし、『ブラウンシュヴァイク雑誌』については、教育思想史研究の上では比較的注意を払われてはこなかったものであり、一方でフェルティヒの研究のように明確な関心を寄せられるときは、この雑誌が4年にわたり一定程度の読者を集めて刊行を継続できた大きな理由の一つであるカンペの「パリ通信」の連載のうちに、彼が見たフランス革命の描写とこの市民革命に対するドイツ啓蒙主義者としての判断を、国民教育論などの連関において検討する場合に限られていた。このような視点から注目されないときには、『ブラウンシュヴァイク雑誌』よりも『総点検』のほうが、編集者・執筆者の思想をより早く示していることに加えて、より理論的・系統的な内容を重厚長大な論文のかたちで提示しているものとして、研究対象としての優先順位を与えられていたことになるだろう。

こういった先行研究の傾向に対して、本研究では、『ブラウンシュヴァイク雑誌』に見出されてきたそのような『総点検』に比してのいわば質的・量的な軽さというものを、逆に積極的な意味をもつものとして受け止め、この教育を主題とする啓蒙雑誌が読者に提示した内容の意義を再検討しようとするものである。近代教育思想史上におけるカンペたちの立論とその体系性を問題とするのではなく、まさしく「啓蒙」を行うことの一環として、すなわち雑誌それ自身が彼らの「理論と実践の往還」であるような営みとして、彼らがどのように自らの思想をより時事的・啓発的に表現し、読者に伝えんとしたのかを確認することが、ここでの主たる目的の一つとなる。この点に注目することによって、『総点検』では見出し難かった公衆との相互関係を浮かび上がらせるための手がかりが得られるかどうかについては、さしあたり期待されるに留まる。とはいえ、『総点検』の刊行を継続しながら『ブラウンシュヴァイク雑誌』を新たに世に出すことの原因については、カンペ自身が次のように述べていることにまずは明確に把握できるだろう。

『総点検』の今までの、そして今後の交渉の中にある意見や、あるいはその理念や主張に問題があるかまったく基礎づけられていなさそうなものが発見できる他の新たな教育著作の中にある意見に、反対する意見をこの雑誌の読者公衆に問いかけ、それによって否

定的意見を突きつけられる側にもその根拠のなさを自覚して誤謬を撤回するか、それとも自らの意見をその根拠ごといつそう明るく納得できる光のもとに置くかという機会を、我々は与えようとするのである。」(7-8)

ここに示された論争的な機会を促進しようとする目的意識は、読書公衆による討議的公共性を前提としているかに見える。しかし、この問題や討議が実現したかになどについての検討は、この雑誌の内容に即して今後進められていくことになる。まず本研究では、具体的分析に先立ち、この雑誌の主目的とそれをめぐる議論に焦点をあてることで、カンペたちが啓蒙雑誌における「理論と実践の往還」をいかに自ら提示しようとしたかを検討する。

1. 雑誌刊行の主目的と検討対象

第1部の冒頭において、カンペは編集者の代表として「この雑誌の目的と対象について」を記している。事前の雑誌創刊予告のさいに掲げた内容をあらためて詳述したものだが、まずはその内容について概括しよう。彼は雑誌の主目的を次のように述べる。「教育 (Ausbildung) 全体とそれによって惹き起こされる人間の幸福に密接な関係をもつあらゆる事柄についての、偏見なく率直な研究を提案し促進することにある。」(2)

『総点検』を継承するこの目的規定に続いて、カンペは、これを目指すにあたって取り上げる対象を、当時のヨーロッパの「文明化された人間性」の基礎としての教育を支える密接な3領域から見出そうとする。つまり、「とくに人間自身と関わり、人間形成 (Menschenbildung) や人間を幸福にすることと直接関係をもつ」ような哲学の領域と、「それが教育 (Erziehung) と教授 (Unterweisung) のための物質的・形式的手段を供給し、また学校の対象である限りでの」古典学の領域、そして「教育学 (Pädagogik)」の領域である (2)。実際にこの3領域の名は雑誌の正式名称にも、ただしカンペたちが協働編集者から退いてトラップ単独編集となる1790年1月号までの間だが、はっきり記されていた。ここでカンペは、教育の目的論を実践哲学 (倫理学) に、内容論・教材論を文学に、そして主として方法論を教育学 (おそらくは経験心理学も含む) に分担させて、当時の文明社会の実態に即したかたちでそれら相互の連関を構想していることになる。そして、このことは雑誌への具体的な寄稿者として「哲学者」「人文主義者」「教育者」が想定されていることを意味しており、カンペは誌上でやがてこの3者同士の「友好的かつ信頼に満ちた」「助言と叱責」

を、それらの主導権争いや狭い専門性のみからの独断に釘をさした上で期待するのである(5)。そこで彼が重視する「公共的研究精神」とは、やはりこのような討議的公共性を指し示している。

そして、この精神を分かち持つのは、3領域の専門家に限定されない。「自身の研究と検討のための動機ときっかけを人間に与えることが、それら研究・検討をまるごと教えてしまうことよりも、はるかに実りの多いものだという信念」をカンペが掲げるとき、読者全体がこの雑誌を手がかりとして自ら思考し始めることが求められている。そして、この態度を喚起しやすい題材として、専門家の見解が分かれているような「教育学的な提言や主張」が主に選ばれ、一般読者も有する「理性と経験の疑い得ない基盤」における協働的批判行為をこれに試みることになるはずである(8)。毎回号の末尾に掲載される教育関連書や教育施設等の紹介に編集者による評価が付されていないのも、この読者自身による判断と事実情報の共有を促す措置である(11-12)。ただし、カンペはその一方で、教育に関する一般常識となっている事柄についても、その根拠を再確認するために検討が有用であると言い添えている。それは「先入観を、きわめて自由に働く思考力によってふるい落とす」ための手立てであるとも述べられているが、『総点検』との関連でみるならば、この再確認作業とは、『総点検』や専門書で提示された内容を、新たな雑誌において、いっそう読者に理解しやすい経験的世界との往還の中で説明し直そうとする試みを意味することになるだろう(8-9)。

ところで、そのような読者の討議を喚起する寄稿を優先的に掲載するということは、その内容の真偽についてまで編集者が責任を負うことを回避させる。「もし要求されたなら内容そのものの責任を著者自身が負う」と付言しているのはそのためである(14)。そして意見発表および反論にさいしての基本的マナーと編集者の中立性を最後に確認することで、カンペは、この雑誌がカントのいわゆる「公的自由」を実践する場となることを期待し、そのための準備を整えたのである。

2. ガルヴェによる異議

だが、創刊予告でも提示していたカンペのこれらの主張は、ガルヴェ(Garve, Chr.)からの異議申立てを招いた。カンペより4歳上の彼は、キケロなどの古典作品や同時代のアダム・スミス『国富論』などの翻訳で名を高め、また通俗哲学者としてもすでに著名だった。カンペ自身もドイツ語純化運動をめぐって彼を批

判的に参照してもいくのだが、ここでのガルヴェはともかくも、カンペたち編集者が掲げる目的と執筆者・読者への期待と疑問を投げかける学識者として現れた。その異議申立てはそもそも、カンペから本雑誌の共同編集者に誘われたガルヴェが、カンペ宛に1787年10月12日付で返信した断り状の中に記されていたものだったが、これをカンペたちはあえて雑誌創刊号の第2の記事に用い、「定期刊行物の必要性に対する異議」と題して掲載した。つまり、編集者による雑誌の意義の説明にその批判が並べ置かれるわけであり、明らかにカンペたちは自らが雑誌の目的とする討議的空間の構築を、この異議申立てを利用してさっそく実践しようとするのである。

ガルヴェによる異議の要点は、まず、能力ある執筆者がその全力を専門的単著ではなく、多数の執筆者による作品集の一部となるような寄稿に注ぐならば、その優れた能力を自身のためにも社会のためにも活かすことにならない、ということにある。その理由として、彼は、専門的単著のほうが題材選択や論理展開を十分徹底できることに加えて、人間本性の一面に着目する。「人間が人間であり続けるかぎり、人間はその最も公益的で最も賞賛すべき企図にさいして、つねに名誉心や利益欲求に刺激される。」それゆえ、優れた名声を個人で得られる単著を書くのと同じほどの力を込めて寄稿論文を著す者は、とくに寄稿論文では「匿名が通例」であるだけにごくわずかである、と言うのである(17)。結局のところ、著名人が名を連ねる雑誌や作品集は外見こそ立派なもの、内容において質量ともに不徹底で見掛け倒しとなりやすい、という指摘である。

この寄稿論文の質の低さという問題は、作品集そのものに留まらず、いっそう悪いことに、そのような作品集に関与させられる執筆者そのものの質の低下を招く、とガルヴェは批判の筆を進める。それは、一つには「執筆者自身の希望と危険のうで完全に単独で執筆しなければならないときには自らに許そうとしないような、このより安易でのんびりしたやり方で従事することに、彼らがしだいに慣れてしまう」という迎合的態度の習慣化の問題である。また、たとえそのような怠惰さを拒絶できたとしても、あちこちの執筆義務に振り回され拘束されることによって、「執筆者自身のより偉大な労作を制作するための力を、それが時間を奪うのと同じく、弱めてしまう」という、能力と意志の分散の問題が生じるのである(18)。書面ではこれに続けて、カンペたちが雑誌編集やそこへの寄稿にかまけず単著を発表してくれるならそちらを読みたいと記しているが、彼ら個々人の著作を実際に読み、ま

たカントたちの浩瀚な哲学書と日々相對しているガルヴェとしては、まったくお世辞ということでもなかったのだろう。

最終的に彼が示すものは、「共同作業者の数が多ければ多いほど、作品の成果はますます不完全になるか、少なくともますます不確かなものになる」という一般原則の再確認だった(19)。カンペたちが提案するある意味で共同学習的・集合知的な相互啓蒙の営みに、ガルヴェの理性と経験は、彼自身が公衆の性質や趣味・傾向を誤解している可能性を留保しながらも、公衆の自己啓蒙・相互啓蒙の誘引となるべき学識者の能力と作品の浪費・劣化を予測していたのである。

ただし、ここでガルヴェが注目しているものはあくまで執筆者側の問題であり、読者である公衆の側の問題については何も論じられていない。ガルヴェは共同編集者への(つまり同時に執筆者への)誘いに対して断りを入れたのだからそれも当然のことではあったが、しかしながらこの異議申立てを雑誌の目的・対象規定のいわば全体に対する批判として取り上げたカンペは、これに対する反論において、ガルヴェの視点を離れていくことになる。

3. カンペによる反論とその実践事例の性質

ガルヴェの異議申立ての文章が終わるやいなや、カンペはすぐ下に続けて「この異議への応答」を掲載している。この応答は第1号のうちほぼ5分の1に相当し、創刊号の中で最長の記事となってしまうのだが、そこで彼はどのように反論し、何を新たに主張しているのだろうか。

まずカンペは、ガルヴェの懇切丁寧な指摘に対して感謝しながらも、「我々と公衆に」与えてくれた彼の「励ましあるいは叱責」を受け止め、その「検討に値する思考の転換」について「私にできるかぎりの不偏不党さと注意深さをもって」向き合うことを宣言している。つまり、ガルヴェの異議を材料にした討議的反論によって、巻頭で述べた雑誌の目的と原則の適用事例をここで読者に提供するわけである。

これを始めるにあたり、カンペは一般的反論から試みる。「肉体の医者と同じく道徳的な医者もまた、甘やかされたわがままな病人を相手にしなければならないときは、その治療の補助手段やその効果や個々のなりゆきを損なうことがないようにしつつ、患者の趣味や気分うまく順応することができるし、また患者側を無理に合わせられないのであればそれらに基づいて順応しなければならない」(20-21)。この比喩を「公

益のために」執筆努力する者に重ねれば、つまり「公衆のそのつどの支配的な趣味によって定められた自身の道徳的処方箋の形式や表現方法を、拒絶してはならない」ということになる(21)。ここにはカンペのいわゆる道徳的流行病に対する問題意識が、啓蒙主義的な治療概念の枠組みにおいて表明されているが、これについては後に再確認するだろう。いまはひとまず、ガルヴェが批判のさいに言及していなかった対象について、つまり読書する公衆の側の性質や問題について、カンペが指摘していることに注目しておく。そしていまは、カンペのこの一般原則を、彼らが直面している公衆と啓蒙とにどのように適用できるかが問われている。このことをカンペは「善き目的のための善善で最も効果的な手段を選択できないとき、何が賢明であるか」という言葉で表現する(21)。そして、現実の具体例や制約を挙げていくことによって、ガルヴェの意見を部分批判しながら、雑誌の主張が「賢明」であることを証拠立てていくのである。

その最初の手がかりとして、カンペはガルヴェの懸念が妥当な著作の種類を限定する。例えば詩や緊張ある構成の戯曲などは、たしかに彼が指摘したとおり、単独の著者による全体的統一性が必要だが、それ以外の著作はむしろそのような釣り合いのとれていないほうが、「我々の次代の要求にある程度適応した思想をきわめて多様な立場からこれまた多様な頭脳の持ち主に刺激を与え循環をもたらす」のに都合がよいと述べるのである(22-23)。裏返して言えば、それは、毎月めまぐるしく変化することに慣れた公衆を相手にすれば、「月とともに自分も変化するか、そうでない公衆を月面に探すか」しかないのだから、という現状認識の結果でもある(23)。

ここまでは公衆の実態をふまえた雑誌の必要性が論じられてきたとすれば、次に取り上げられるのは、いかにしてそのような成果を挙げる雑誌を実現できるかという可能性の問題である。しかし、これについてカンペは、先に引用したガルヴェによる人間本性の、つまり執筆者の名誉心や利益欲求についての説明を参照しながら、そのような執筆者の利己的・退嬰的選択が不可避のものではないことを指摘する。そこで反論の具体的事例として列挙されるのが、ヴィーラントの『ドイツメルキュール』やメンデルスゾーンの『一般図書目録』といった当代一流の雑誌であり、そこにその編集者自身が執筆し掲載した『オーベロン』や『フェードン』といった卓越した作品の名であった。もともと、編集者は寄稿執筆者とは異なり雑誌販売によって直接的な名誉心や利益欲求が満たされ得るのだから、このカンペの批判はやや的外れではあるのだが、その事例

の結びとしてガルヴェ編集の『美学目録』とそこでの彼自身の活躍を示唆することで、彼の異議に記されていたカンペたちへの賞賛への返礼もすませた格好である(26-27)。これもまた、巻頭に示した原則にある執筆者間の相互尊重というマナーのお手本を、カンペが率先して読者に提供しているとも言える。

さて、人間の心(Seele)の情念や衝動とその理性による統御について、教育の観点から長らく関心を寄せてきたカンペにとって、ガルヴェが指摘する人間の名誉心や利益欲求の強さは首肯できるものだった。ただし、カンペはそこに、執筆者が単著に携わるときと同様、多数が関わる著作への寄稿者としても、自らの情念や衝動を「制限する余地がある」という条件を加えようとする(28)。単著がよく読まれて寄稿論文は読まれない、というのは逆の場合も同じほど経験があるから、たんに悟性的に否定可能である。しかし、それ以上に重要なことは、ここでカンペが「匿名が通例」であるかどうかについてこだわり、次のように述べている点にある。

「自らの能力や公益的意図やまっすぐな歩みを自覚する善良な執筆者は、特別な場合をのぞけばどんな場所でも、そして雑誌においても、そして彼らが優れた率直さをもって語る場合でも、自分の名前を隠さないようにするものである。なぜなら、まさしくその純粋で善き意図の自覚こそが、彼に率直に書く勇気を与え、書いたものを公に認めさせ、もし避けられないときにはそのために耐え忍ばせるからである。そうでない執筆者は、その駄作を単著であろうと雑誌と同じように匿名で発表することがあるものだ。」(29)

この主張によってカンペは、同時に二つのことを行っている。一つは、彼らの雑誌に寄稿しようとする執筆者は、巻頭の目的説明の末尾にあった「内容そのものの責任を著者自身が負う」という原則を、いわば実践上の覚悟として読者(つまり将来の可能的執筆者)に指示し直していることである。検閲に関わる危険については「特別な場合」として配慮してはいる。しかし、それ以外の場合には、これまで啓蒙雑誌を読みながらもただ受容的であり続けた多数の読者に対して、いわば消費者的な姿勢で一方向的に執筆者や編集者を批判することは忌避されるべきだと伝えているのである。もちろん、あらゆる読者を執筆者に仕立てることがここでの目的ではあり得ない。だが、読者もまた今後このような対等な討議的關係のなかに進んで参加することが可能であり、またそのさいにはこのような自覚が必要であり有益であることを、カンペはガルヴェに語るかたちで公表していることである。カンペがここで行ったもう一つのこと、優れた執筆者が匿名でなく顕名

で寄稿すると述べることで、可能的執筆者である読者がそのような徳性をもつことを示すため匿名使用を自ら拒絶するように導いているということである。つまりカンペは、名誉心や利益欲求の自己統制について論じながらも、そのことによって読者の名誉心をかえって刺激し、その個人的利益と公益とに適う表出方法を提示しているのである。ここではもはや、ガルヴェが指摘した匿名性と著作の質低下の関連性は、カンペが彼らの周囲に居並ぶ公衆へとこの雑誌の提供する討議的空間への参加を呼びかけるための手がかりとして拡大利用されていることになる。

4. 公衆批判とその射程

反論の後半部分では、ガルヴェが指摘した「月ごとの分冊の中に、多くの著作家のさまざまな論文がわざわざ掲載されている」がゆえの質的・量的不徹底について、カンペがより詳細に検討を行っていく。彼が列挙するその反論の根拠や条件を、要約すれば次のとおりとなる。

1) 専門的学識を社会構成員全体の利益に供し得る

雑誌とは、「学識者の頭脳と諸学派からのあらゆる性質の有用な知識を、あらゆる身分階層を通じて周知させるための、巧みに考案され目的に適った一つの手段なのである」。ここでは、学識者が生産する知識・思想を「金貨」に、一般庶民や貧民が使用するそれらを「小額硬貨」になぞらえて、前者の「金貨」がそのままでは後者の生活では使用できず、利用しやすい程度に噛み砕くことによって、つまり月刊雑誌の記事・寄稿論文程度にまで細分化されることによって、ようやく社会全体に流通することを説明している(32-33)。

ここでカンペは、ドイツ啓蒙主義において以前より問題視されてきた専門的学識と公衆の断絶、つまりある面においては理論と実践との乖離とも言い換えられる状況に対して、雑誌を媒介(メディア)としてその両者を結びつけることで解決を促そうと提案している。ただし、そのさい比喩的に用いられている貨幣が流通によって循環し、最終的には「金貨」の所有者もその恩恵に預かることができるのに対して、この箇所では諭えられた学識者の側は、それと同じように公衆からの流通と循環によって自らも利益を得られるかが問われることになる。これについては、カンペが示す「公益性」がすでに学識者も含む全体的利益を指し示しているとすれば、やはり自らに還元されていると考えることができる。

2) 公衆への伝達の臨機性

続いてカンペは、「豊かな着想の持ち主がそれらを
大著へと結合させつつあるとき、しばしばいくつもの
興味深い公益的な発想が彼の思考する頭脳のなかでつ
いのように飛び出すにもかかわらず、それらが手元
の大著か別の本に記されるまで決して世に現れること
がない」という甚大な損失を、月刊雑誌はそれらの発
想を適宜すくい取ることによって阻むことができると
主張する (33-34)。

これは、先の根拠が扱った知識の量の問題とあわせ
て、その供給におけるいわば機会損失の問題に注目す
るものである。体系的思索の価値は認めたくて、それ
が失わせるものは時間のみならず、体系性に速やかに
適応しない断片的な着想であると指摘するのである。
それらの断片はもちろん体系的著作に比べて不十分
で特殊なものに留まるが、その着想そのものに必要
最小限の説明を加えて寄稿することによって、執筆者
本人だけでなくその着想に対する読者からの反応との
結合を通じて、発展の可能性を確保しようとしている。
やはり雑誌を学識者と公衆との媒介に用いるというこ
の主張では、しかし両者の関係は最終的には双方向的
な討議を可能とするものになり得るだろう。

3) 共通目的をもつ者による集団心理の効果

ここでカンペは、執筆者間の徳性促進に目を向ける。
「兵士が敵に単身戦いを挑むのか、それとも味方と隊
列を組んで立ち向かうか」という比喻によって、「根
深い偏見や誤謬との戦い」に赴く執筆者もまた、人間
本性としての「結合された力への支援と信頼」によっ
て、「気高い率直さと勇氣」を発揮しやすくなるとい
う利益を得るとするのである (35-36)。この場合の雑
誌の媒介としての性質は、共通目的を有する者同士の
連帯性を生むものとして捉えられている。

ただし、そこでの共通目的とは、「偏見」や「誤謬」
として表現されているところの、伝統的社会体制がも
つ弊害であり、啓蒙主義の立場から疑いなく否定する
ことのできる対象にほかならない。それは、ある意味
で啓蒙の内部からの反論を予期する必要なく安心して
批判する者同士の連帯感を育むものにすぎず、そこ
での「率直さ」や「勇氣」が内部における相互批判のさ
いにも、つまり執筆者同士の「偏見」と「誤謬」を対
象とする場合にも、連帯感のもとで発現するかが問題
となる。とはいえ、反論の前半部でカンペが示した執
筆者の能動的・自立的性質を、ここでは相互支援関係
のもとで軟化させ、一般読者がより接近しやすい水準
を提示しているという意味も持ちあわせてはいる。だ
が、この公衆の実情について、カンペは次の箇所であ

そう厳しい批判を与えるのである。

4) 公衆の実情に適合した簡便な学識情報の提供

「我々の洗練された人々は、もちろん例外はあるが、
落ち着きがなく柔弱で、苦勞するやり方はすべて遠ざ
け、感覚と想像力の娯楽だけは休みなく手に入れよう
と努力するという、心身ともに甘やかされた人々なの
である。」(36-37)

「しかしこういう善良な人々はみな、文学について
ある程度の趣を備えようとするし、しかしそうしてま
た文学についておしゃべりをするときには片言隻句を
交わし合うのである。」(37)

これらの文章は、カンペがガルヴェに語りかけなが
ら同時に公衆にも説明を行っているものとしては、過
剰に攻撃的なものと見なしうる。それというのも、こ
こで批判されている「甘やかされた人々」もまた、こ
の雑誌が読者として期待する公衆の一部に含まれて
いるはずであるからだ。しかし実際には、そのような性
質の公衆は、この明らかに時代の流行に相對しようと
する雑誌の創刊号を予約購入しようとはしなかったの
かもしれない。その場合、この箇所でのカンペは、彼
らの問題意識をすでに共有しており、それゆえに将来
の執筆者としての可能性もいっそう高い読者の層と、
今後の読者になりうるが今の段階ではいま批判された
状態に陥っている人々の層とに、公衆全体を区分して
いることになる。この結果、カンペが提示する啓蒙雑
誌を媒介とする関係は、最上位に存在する執筆者・編
集者から上層の公衆への啓蒙、そしてこれらが討議的
公共性を形成するなかで読者として取り込んでいくべ
き下層の公衆への啓蒙という、3段階の階層性を有す
るものと考えられるだろう。つまり、そこでは、いま
カンペがガルヴェの肩越しに語りかけている上層の公
衆は、彼らの問題意識をさらに共有するように自己服
従しながら、下層の公衆に対して啓蒙的指導性を発揮
するというかたちで、最上位のカンペたちによって統
制される中間層として機能するのである。

このような問題性を胚胎しながらも、カンペは、批
判対象となる人々の現状に適合した雑誌編集の意義に
ついて根拠付けようと試みる。しかし、それは、す
でに彼が述べてきた公衆の「支配的な趣味」にそのまま
順応することを意味してはいなかった。平易に考える
なら、彼らを読者として取り込むべき雑誌は、その軽
佻浮薄な趣味にある程度合わせた内容や表現形式を優
先的に選択すべきである。ところが、カンペはそれと
異なる主張をここで行うのである。

彼によれば、雑誌は「気軽でお行儀のよい会話を何
も提供せず、むしろ個々人の熟考をもって読まれるよ

うな事柄を、取り扱い整えなければならない」(36)。つまり、そのような公衆が慣れ親しんでいる作品群の内容や表現形式をそのまま導入するのではなく、主題や内容については一定程度の水準を維持するものとし、その一方で表現形式についてはここで「整え」という指示を与えている。これは、会話形式や感覚的表現などを用いることなく、しかし学識的内容を彼らに理解しやすいかたちへと修正することを意味している。これが単純化という意味も含むことは、次の箇所を確認されることになるのだが、これらが「公衆の趣味」に合わせるといふことにほかならない。それは、ガルヴェなら不可能であり有用性に乏しいとみなすような、専門的学識の簡便な要約と伝達を行うべきであるということの意味する。

このことの有効性については、カンペは二つの現実的な想像を提示して説明しようとする。まず、多忙な仕事や退屈な時間の埋草として容易に読めるものを必要としている人々の場合、手元により適切な本がなければ流行のパンフレット本に飛びついてしまう(37)。そこで、流行本や雑誌の洪水の中に、自らの雑誌を参加させて、このような読書傾向を修正する機会を公衆に与えようというのである。しかし、この修正の可能性についてはすでに指摘したとおり、いわゆる下層の公衆に対してその趣味を直接修正するよう強制しないかぎり困難であると想像される。

するとカンペの念頭にあるのはもう一つの想像事例、つまり「子どもの教育に携わる人々」のように、多忙きわまる中で学識者の著作を真面目に読もうと望む者の場合である。彼らはすでにいわゆる上層の公衆として、いまだ学識を持ちあわせていないにせよカンペたちとは啓蒙への態度と問題意識とを共有できていることになる。そのような自己啓蒙者としての彼らは、雑誌論文程度であれば多忙な中の短時間の読書を通じて「休養」「娯楽」「利益」を得ることができる(38-39)。「それによって人類の、また彼ら自身のものでもある重要な事柄について、啓蒙され、彼ら自身の思索へと刺激されるのであり、またそれによって精神と心情の支配的な流行病と、これをはねのけるための処方箋に注意させることができるのである。」(39)

ここに述べられる「刺激」と「注意」は、雑誌講読を通じてまずは能動的な公衆の側に形成され、しかるのちに彼らが執筆と討議に加わることを通じて、「流行病」に罹患している公衆へとその対象を拡大していくことになる。

そうしてカンペが最終的に、「雑誌が手段を見つげ出さなければ人類のこの貴重な階級からほとんど失われてしまったであろう純粋な利点は、全体の中にある

程度学識のある諸階層をいたるところで望むままに紛れ込ませること」(39)と結論付けるとき、この「紛れ込ませる」ことは公衆全体に均質的に展開するのではなく、上からの浸透として、「金貨」から「小額硬貨」への細分化の過程として、成立するはずなのである。

5) 多様な意見間の討議を促進

先ほど単純化について指摘したのは、この箇所の内容を指す。カンペによれば、専門的単著の体系性や一体性は言うまでもなく利点であると同時に、偶然や好みでその本を選んだ読者にとって、書かれた内容が必要以上に確からしく思われてしまうという意味での欠点でもある。しかし、だからといって反対意見を述べているような別の書物を読ませるといふのは現実的ではない。そこで、雑誌がそれらの対立点などを「いま一度ただで伝えてくれる」のである(40)。

この、公益的要件についての対立点を明確化するという意味においては、カンペが雑誌で果たそうとする役割は、これまで指摘してきたような啓蒙の階層性や一方向性を抑制する働きを持つもののように理解できる。より上位の階層からの啓蒙を一方向的に受容することを回避して、それらの内容について公衆が自ら判断することを、ここで要求しているからである。

ところが、このような啓蒙の相互性回復のための根拠付けが、同時にまた次に示される単純化の必要性によって再び弱められていく。つまり、カンペの雑誌では「執筆者が単著のために案出するよりもずっと短くせきたてられるように述べられる」のであり、「単著の中で自らに許すよりもきわどい語調というようなものを許す」のである(41)。

もっとも、複雑な問題について検討するにさいして、専門的学識を有しない者は、当然のことながらその問題をまず単純化しうえでようやく熟慮可能となるのであり、その段階を経てはじめて本来の複雑性を備えた問題そのものを把握することができることになる。こういった特性によって、雑誌は「公的な研究精神を必然的に刺激するほかない」(40)とカンペが強調するのは、そのような段階的自己啓蒙の進展を期待してのことにほかならない。

しかしながら、この単純化され極端化された学識の伝達が、自己啓蒙者としての意志を持ちながらそのための余裕を有しない公衆に習慣化されたとき、彼らは段階を登り進めていくよりも、善悪や正否を結論づけやすく単純化された言説によって思考することを回避できなくなるかもしれない。この危険性がいかなる現実的推移を示すかについては、雑誌の将来のうちに問われることとなる。

6) 方法論上の相対性への適応

最後の根拠付けとして、カンペが「他の書物よりも時代のその都度の諸要求に配慮できる」(41)と述べるとき、これは先述の臨機性について雑誌全体のな有用性という視点から再び指摘したものに見える。「啓蒙と啓発の仕方はどんなものであれ、世界のその他あらゆる事柄と同様に、相対的である。つまり、我々のその都度の大きなあるいはわずかな要求との関係において、あるいは我々がそれについて有する利益との関係において、上下する。」(41-42)この説明もまた、時事的状況への適応を雑誌に要求している内容である。

ただし、ここでカンペは、啓蒙の方法論上の相対性に配慮しつつ、編集者・執筆者があらかじめ獲得している最上位の啓蒙者という機能については、相対化しようとしていない。

すなわち、カンペが見るところ、雑誌の編集者・執筆者にとって特に大きな義務とは、「自らの視野に収めた同時代人がすることやさせることを静かに予断なくそして鋭く観察すること」であり、この観察に基づいて「時々それがいつどのように新旧の迷い道に入り込んでしまうかを罰することなくたちまち探し出し、それによって彼らに迅速かつ好意的に伝えること」なのである(43)。このような観察者・助言者としての編集者・執筆者には、あくまで表現のうえでではあるが、自らもまた「迷い道」に踏み入りかねないという自己への批判的視点が欠落している。ここにおいてやはり、啓蒙する最上位の存在としての自己像は、揺るぎないものとしてガルヴェと読者とに提示されていたのである。

おわりに 今後の課題

以上、『ブラウンシュヴァイク雑誌』第1号の巻頭

を飾るカンペとガルヴェの相互批判を手がかりとして、この啓蒙雑誌に自覚的に与えられた目的ならびに方法と、それらについて具体的に実践しようとするカンペの言説が指し示したところの啓蒙の問題性が、それぞれ明らかとなった。この矛盾が、いわゆる「啓蒙の弁証法」として展開していくことになるのか、それとも討議的公共性を形成しゆくなかで段階的に解消されていくのかについては、雑誌内容の具体的検討を進めていくなかで今後確認すべき課題である。

あるいはカンペ自身もまた、自らのそのような課題を自覚したうえで、『総点検』よりもはるかに軽快なこの新雑誌の舵取りを、共同編集者とともに討議していたのかもしれない。その実態は今後たどっていくこととして、しかしながらカンペたちがほどなく直面するフランス革命という巨大な事件は、漸進的な啓蒙の可能性を大きく動揺させることとなるのである。

引用・参考文献

- Trapp, E.C., Stuve, J., Heusinger, C., Campe, J.H. (Hrsg.), Braunschweigisches Journal philosophischen, philologischen und pädagogischen Inhalts, Verlag der Schulhandlung, Erstes Stück, 1788; Rep. Nendeln/Liechtenstein, 1972.
- Schmitt, Hanno (Hrsg.), Briefe von und an Joachim Heinrich Campe. Briefe von 1766-1788, Herzog August Bibliothek Wolfenbüttel, 1996.
- 森川直『近代教育学の成立』東信堂 2010年
- 山内芳文『ドイツ近代教育概念成立史研究』亜紀書房 1994年
- Fertig, Ludwig., Campes politische Erziehung, Darmstadt, 1977.